

万象我師・ひとづくり

黄綬褒章を受章ならびに卓越した技能者（現代の名工）として
第3回ものづくり日本大賞を受賞
「現代の名工展2016in東京」に選ばれ参加された

常泉 善男

ものづくりとの出会い

昭和42年、電気機器メーカーの亀戸工場に入社した。入社のかっけは、生まれも育ちもこの下町亀戸であったことと、既に兄がこの会社で働いていたことであった。

この会社では、ものづくりの現場で働く者の中から優秀な人材を対象に入社後3年間の技能者養成所を開設しており、兄もその中で勤労勉学していた。他の電気メーカー同様に「金の卵」として採用した中学校を出たばかりの若者が、働きながら技能と知識を修得できる工場内教育システムを早くから設けていた。

さて一日の始まりは、工場独自の亀戸体操である。体操の号令が仕事始め前に各職場のスピーカから流れ始め、職場建屋内の安全通路上で一列横並びとなり行われる。その後は各職場（組）単位での組朝礼が始まる。現場管理監督者の職制で「組長」と呼ばれる「親父」のあいさつから始まる朝礼であった。朝礼の中身は、なんの変哲もない、日々の新聞紙面からの世間話だったが、現場で働く職人には「これから一日が始まる」と言う緊張感がいつもあったことを覚えている。

組長にとっては、その日の部下一人ひとりの心理・健康状態を見る大切な仕事のスタートとなっていた。現場ではさらにグループ化され職人の要として「棒心（ぼうしん）」と呼ばれている取り纏め者がいた。その棒心から組朝礼後にその日の作業内容が指示され作業（生産）が行われていた。

工場に働く従業員は3,000人弱で、国鉄（現在の

JR）総武線亀戸駅から東武線で乗り換え一つ目の亀戸水神駅にあった。国鉄亀戸駅からの満員電車はこの駅でガラガラとなる。この工場は新製品を多く手掛け、会社ではマザー工場としての位置づけがあった。ここから生まれた産業用、家庭用電気機器製品は他の工場へ量産製品として製品移管されて行く。その為、製品毎の部門が多く、いわば町工場の集まりのようであった。こんな工場の雰囲気が、入社したての私にとって毎日が活き活きとものづくりをしている職場と感じさせていた。

現場の職人は、仕事の始まる前に段取りや自分の使う工作機械・治工具の点検・注油といったアイドルリングを済ませ、その機械や作業台の傍でタバコをふかしていた。このような、昔の言葉でいう「矩形運動」を日々実践していた。職人は気性が荒く、当時はまだ工場内で統一した作業手順も定まっていなかったことから、「俺のやり方」、「俺流」、「俺の時間」で仕事をしていましたが、決して「できない!」という言葉を出さないプライド（職人氣質）を持っていた。会社ではこの職人氣質をどの職場にも浸透させ、品質の高い製品を作り上げていた。

当時の「ものづくり力」は現在も脈々と息づいているのだろうか

ものづくりの世界では「働き甲斐」と「やり甲斐」が、職人にとって必要不可欠な要素であると教えられた。今や日本国内では製造業に携わる割合が30%と、昭和の時代で日本経済を支えてきた自負が跡形もない。品質の高い製品は、高い技能を有した技能者によって作り上げられる。我々職人が作り出す自

社製品こそが、社会に貢献する優れた製品であると定義付けていた時代である。大企業と云われる製造業の各社がこぞって技能の高さを競っていた時代であった。

私は、今でも当時（昭和40年代）のものづくりの活況を覚えている。恵まれたことに、技能五輪にも参加させていただく機会も得た。

昭和45年、技能五輪がいよいよ日本（千葉県・中央技能センター）で国際大会を開くこととなった。技能五輪へ向けて育成された選手はみな会社の将来を担う優秀な若手技能者である。しかし、ものづくりの実践では即、現場で通用する訳ではない。ものづくりを実践するにはさらなる経験が必要であり、まだまだ一人前というには早い人材であるが、その第一ステップが、当時は「技能五輪」であった。一人前となるためには、超一流の技能と絶えず技能向上を目指す探求心と自己研鑽力が求められる。厳しい訓練で鍛え上げられた技能向上心がものづくりの形となって、実製品の中で作り上げることができるかどうか重要である。

Made in Japan への想い

最近では「Made in Japan」のタグ・プレートが、巷であまり見かけなくなった感がある。世界に認められた「ものづくり力」が、今はどこに向かってしまったのか……。ものづくりを目指す若者に出会う機会が少なくなってしまう寂しい感がうかがえる。

「Made in Japan」は、単に製造国籍日本という意味ではない。「Made in Japan」は、世界一の良い製品としての位置づけをもっている。

ものづくり日本が世界を凌駕し再び蘇ることを切に願っている一人として、製造業こそ日本人が備えていた勤勉実直の天性であると感じている。現代の若者が少しでもものづくりに関心を持ち、「やってみたい！」と思ってくれる人材が増えることを切に願うものである。

ものづくりは、自分との勝負、一生涯を通してもなしえない「楽しみ」がある。

【自己紹介】

私の本来の職種は「手仕上げ工」で金型（主にプレス）製作の技能者である。変圧器が油入り（湿式油性）からモールド（乾式）への開発展開したときに、モールド樹脂成型用金型の試作から量産まで携わった。

それがきっかけで変圧器の製造部門に移った。ここでは、将来の省エネ需要を考慮し、鉄心部材にエネルギー損失の極めて少ないアモルファス材を採用した変圧器を開発した。このアモルファス材は、硬くて脆い材料で量産加工がしづらく従来設備や治工具による加工方法を大きく改善しなければならない材料であった。

当初は小形変圧器からの開発であったが、現在では大形変圧器でも「アモルファス変圧器」を生産することができ、省エネ対象製品として活躍している。

60歳までは、変圧器製造現場の管理監督者としてモノづくりの部門に在籍し、そこから65歳退職までの5年間は、社内技能教育の計画立案から具体的教育の実施を行ってきた。

いわば、ものづくりの生産性を向上させるためのキーマンとして位置付けている現場管理監督者の育成と技能者の階層別教育を行う立場の仕事に携わることができた。製造業の一企業で「人づくり・ものづくり」の大切さを学ばせて頂いた一人である。

